

外科室

泉鏡花



実は好奇心のゆえに、しかれども予は予が画師たるを利器として、ともかくも口実を設けつつ、予と兄弟もただならざる医学士高峰をしいて、某の日東京府下の一病院において、渠が刀を下すべき、貴船伯爵夫人の手術をば予をして見せしむることを余儀なくしたり。

その日午前九時過ぐるころ家を出でて病院に腕車を飛ばしつ。直ちに外科室の方に赴くとき、むこうより戸を排してすらすらと出で来たれる華族の小間使とも見ゆる容目よき婦人二、三人と、廊下の半ばに行き違えり。

見れば渠らの間には、被布着たる一個七、八歳の娘を擁しつ、

見送るほどに見えずなれり。これのみならず玄関より外科室、外科室より二階なる病室に通うあいだの長き廊下には、フロックコート着たる紳士、制服着けたる武官、あるいは羽織袴はかまの扮装いでたちの人物、その他、貴婦人令嬢等いずれもただならず気高きが、あなたに行き違い、こなたに落ち合い、あるいは歩し、あるいは停し、往復あたかも織るがごとし。予は今門前において見たる数台すだいの馬車に思い合せて、ひそかに心に領うなずけり。渠らのある者は沈痛に、ある者は憂慮きづかわしげに、はたある者はあわただしげに、いずれも顔色穏やかならで、忙せわしげなる小刻みの靴くつの音、草履ぞうりの響き、一種寂寞せきぱくたる病院の高き天井と、広き建具と、長き廊下との間にて、異様の躑音きようおんを響かしつつ、うたた陰惨の趣をなせり。

予はしばらくして外科室に入りぬ。

ときに予と相目して、脣^{しんべん}辺に微笑を浮かべたる医学士は、両手を組みてややあおむけに椅子^{いす}に凭^よれり。今にははじめぬことながら、ほとんどわが国の上流社会全体の喜憂に關すべき、この大いなる責任を荷^{にな}える身の、あたかも晚餐^{ばんさん}の筵^{むしろ}に望みたるごとく、平然としてひややかなること、おそらく渠のごときはまれなるべし。助手三人と、立ち会いの医博士一人と、別に赤十字の看護婦五名あり。看護婦その者にして、胸に勳章帯びたるも見受けたるが、あるやんごとなきあたりより特に下したまえるもありぞと思わる。他に女性^{にょしやう}としてはあらざりし。なにがし公と、なにがし侯と、なにがし伯と、みな立ち会いの親族なり。しかして一種形容すべからざる面色^{おももち}にて、愁然として立ちたるこそ、病者の夫の伯爵なれ。

室内のこの人々に瞻^{みまも}られ、室外のあのかたがたに憂慮^{きづか}われて、

塵ちりをも数うべく、明るくして、しかもなんとなくすさまじく侵すべからざるごとき観あるところの外科室の中央に据えられたる、手術台なる伯爵夫人は、純潔なる白衣びやくえを絡まといて、死骸しがいのごとく横たわれる、顔の色あくまで白く、鼻高く、頤おとがい細りて手足は綾羅りょうらにだも堪えざるべし。脣くちびるの色少しく褪あせたるに、玉のごとき前歯かすかに見え、眼めは固く閉ざしたるが、眉まゆは思いなしか鬢ひそみて見られつ。わずかに束つかねたる頭髮は、ふさふさと枕まくらに乱れて、台の上にこぼれたり。

そのかよわげに、かつ気高く、清く、貴とうとく、うるわしき病者の俯おもかげを一目見るより、予は慄然りっぜんとして寒さを感じぬ。

医学士はと、ふと見れば、渠は露ほどの感情をも動かしておらざるもののごとく、虚心に平然たる状露さまあわれて、椅子に坐すわりたるは室内にただ渠のみなり。そのいたく落ち着きたる、これを

頼もしと謂わば謂え、伯爵夫人の爾しかき容体を見たる予が眼よりはむしろ心憎きばかりなりしなり。

おりからしとやかに戸を排して、静かにここに入り来たれるは、先刻さきに廊下にて行き逢いたりし三人の腰元の中に、ひとときわ目立ちし婦人おんななり。

そと貴船伯に打ち向かいて、沈みたる音調もて、

「御前ごぜん、姫様ひいさまはようようお泣き止やみあそばして、別室におとなしゅういらつしやいます」

伯はものいわで領うなずけり。

看護婦はわが医学士の前に進みて、

「それでは、あなた」

「よろしい」

と一言答へたる医学士の声は、このとき少しく震いを帯びて

ぞ予が耳には達したる。その顔色はいかにしけん、にわかになりに少しく変わりたり。

さてはいかなる医学士も、驚破すわという場合に望みては、さすがに懸念のなからんやと、予は同情を表ひょうしたりき。

看護婦は医学士の旨を領してのち、かの腰元に立ち向かいて、
「もう、なんですから、あのことを、ちよつと、あなたから」

腰元はその意を得て、手術台に擦すり寄りつ、優ひざに膝のあたりまで両手を下げて、しとやかに立礼し、

「夫人、おくさまただいま、お薬を差し上げます。どうぞそれを、お聞きあそばして、いろはでも、数字でも、お算かぞえあそばしますように」

伯爵夫人は答なし。

腰元は恐る恐る繰り返して、

「お聞き済みでございましょうか」

「ああ」とばかり答えたまう。

念を推して、

「それではよろしゅうございますね」

「何かい、ねむりぐすり麻酔剤をかい」

「はい、手術の済みますまで、ちよつとの間でございますが、
げし御寝なりませんと、いけませんそうです」

夫人は黙して考へたるが、

「いや、よそうよ」と謂いえる声は判然として聞こえたり。一同
顔を見合わせぬ。

腰元は、さし諭すがごとく、

「それでは夫人、おくさま御療治ができません」

「はあ、できなくつてもいいよ」

腰元は言葉はなくて、顧みて伯爵の色を伺えり。伯爵は前に進み、

「奥、そんな無理を謂つてはいけません。できなくつてもいいということがあるものか。わがままを謂つてはなりません」

侯爵はまたかたわらより口を挟めり。

「あまり、無理をお謂やつたら、姫ひいを連れて来て見せるがいの。疾はやくよくならんでどうするものか」

「はい」

「それでは御得心でございますか」

腰元はその間に周旋せり。夫人は重げなる頭かぶりを掉ふりぬ。看護婦の一人は優しき声にて、

「なぜ、そんなにおきらいあそばすの、ちつともいやなもんじゃございせんよ。うとうとあそばすと、すぐ済んでしまいます」

このとき夫人の眉は動き、口は曲みて、瞬間苦痛に堪えざるごとくなりし。半ば目を睜きて、

「そんなに強いるなら仕方がない。私はね、心に一つ秘密がある。麻醉剤は謔言を謂うと申すから、それがこわくつてなりません。どうぞもう、眠らずにお療治ができないようなら、もうもう快らんでもいい、よしてください」

聞くがごとくんば、伯爵夫人は、意中の秘密を夢現の間に人に呟かんことを恐れて、死をもてこれを守ろうとするなり。良人たる者がこれを聞ける胸中いかん。この言をしてもし平生にあらしめば必ず一条の紛紜を惹き起こすに相違なきも、病者に対して看護の地位に立てる者はなんらのこともこれを不問に帰せざるべからず。しかもわが口よりして、あからさまに秘密ありて人に聞かしむることを得ずと、断乎として謂い出させる、夫

人の胸中を推すれば。

伯爵は温乎おんことして、

「わしにも、聞かされぬことなんか。え、奥」

「はい。だれにも聞かすことはなりません」

夫人は決然たるものありき。

「何も麻酔剤ますいざいを嗅かいだからつて、謔言たしなを謂うという、極きまつたこともなさそうじゃの」

「いいえ、このくらい思つていれば、きつと謂いますに違いありません」

「そんな、また、無理を謂う」

「もう、御免くださいまし」

投げ棄そむつるがごとくかく謂いつつ、伯爵夫人は寝返りして、横よこに背かんとしたりしが、病める身のままならで、齒を鳴らす

音聞こえたり。

ために顔の色の動かざる者は、ただあの医学士一人あるのみ。渠は先刻さきにいかにしけん、ひとたびその平生を失しせしが、いまやまた自若となりたり。

侯爵は渋面造りて、

「貴船、こりやなんでも姫ひいを連れて来て、見せることじゃの、なんぼでも児このかわいさには我が折れよう」

伯爵は頷きて、

「これ、綾あや」

「は」と腰元は振り返る。

「何を、姫を連れて来い」

夫人は堪たまらず遮おほりて、

「綾、連れて来んでもいい。なぜ、眠らなけりや、療治はでき

ないか」

看護婦は窮したる微笑えみを含みて、

「お胸を少し切りますので、お動きあそばしちやあ、危険けんのんでございます」

「なに、わたしや、じつとしている。動きやあしないから、切つておくれ」

予はそのあまりの無邪気さに、覚えず森寒を禁じ得ざりき。おそらく今日きょうの切開術は、眼を開きてこれを見るものあらじとぞ思えるをや。

看護婦はまた謂えり。

「それは夫人おくさま、いくらなんでもちつとはお痛みあそばしましようから、爪つめをお取りあそばすとは違いますよ」

夫人はここにおいてぱつちりと眼を睜ひらけり。気もたしかにな

りけん、声は凜りんとして、

「刀とうを取る先生は、高峰様だろうね！」

「はい、外科科長です。いくら高峰様でも痛くなくお切り申すことはできません」

「いいよ、痛かあないよ」

「夫人ふじん、あなたの御病気はそんな手軽いではありません。肉を殺そいで、骨を削るのです。ちつとの間御辛抱なさい」

臨検の医博士はいまはじめてかく謂えり。これとうてい関雲長にあらざるよりは、堪えうべきことにあらず。しかるに夫人は驚く色なし。

「そのことは存じております。でもちつともかまいません」

「あんまり大病なんで、どうかしおつたと思われる」

と伯爵は愁然たり。侯爵は、かたわらより、

「ともかく、今日はまあ見合わすとしたらどうじゃの。あとでゆつくりと謂い聞かすがよかろう」

伯爵は一議もなく、衆みなこれに同ずるを見て、かの医博士は遮りぬ。

「一時後ひとときおくれては、取り返しがなりません。いったい、あなたがたは病を軽蔑けいべつしておらるるから埒らちあかん。感情をとやかくいうのは姑息こそくです。看護婦ちよつとお押え申せ」

いと厳おごそかなる命のもとに五名の看護婦はバラバラと夫人を囲みて、その手と足を押えんとせり。渠らは服従をもつて責任とす。単に、医師の命をだに奉ずればよし、あえて他の感情を顧みることを要せざるなり。

「綾！ 来ておくれ。あれ！」

と夫人は絶え入る呼吸いきにて、腰元を呼びたまえば、慌あわてて看

護婦を遮りて、

「まあ、ちよつと待つてください。夫人、どうぞ、御堪忍あそばして」と優しき腰元はおろおろ声。

夫人の面は蒼然そうぜんとして、

「どうしても肯ききませんか。それじゃ全快なおつても死んでしまいます。いいからこのままで手術をなさいと申すのに」

と真白く細き手を動かし、かろうじて衣紋えもんを少し寛くつろげつつ、玉のごとき胸部を顕あらわし、

「さ、殺されても痛かあない。ちつとも動きやしないから、だいじようぶだよ。切つてもいい」

決然として言い放てる、辞色ともに動かすべからず。さすが高位の御身とて、威厳あたりを払うにぞ、満堂ひと齊ひとしく声を呑のみ、高しわぶきき咳せきをも漏らさずして、寂然せきぜんたりしその瞬間、先刻さきよりちと

の身動きだもせで、死灰のごとく、見えたる高峰、軽く見を起こして椅子いすを離れ、

「看護婦、メスを」

「ええ」と看護婦の一人は、目を睜みはりて猶予ためらえり。一同齊しく愕然がくぜんとして、医学士の面を瞻みまもるとき、他の一人の看護婦は少しく震えながら、消毒したるメスを取りてこれを高峰に渡したり。医学士は取るとそのまま、靴音くつおと軽く歩を移してつと手術台に近接せり。

看護婦はおどおどしながら、

「先生、このままでいいんですか」

「ああ、いいだろう」

「じゃあ、お押え申しませう」

医学士はちよつと手を挙あげて、軽く押し留とどめ、

「なに、それにも及ぶまい」

謂う時疾はやくその手はすでに病者の胸を搔かき開あけたり。夫人は両手を肩に組み、身動きだもせず。

かかりしとき医学士は、誓うがごとく、深重嚴肅たる音調も
て、

「夫人、責任を負つて手術します」

ときに高峰ふたけの風采ふうさいは一種神聖にして犯すべからざる異様のも
のにてありしなり。

「どうぞ」と一言答こたへたる、夫人が蒼白なる両ほの頬ほに刷はけるが
ごとき紅を潮しつ。じつと高峰を見詰まめたるまま、胸に臨める
ナイフにも眼まなこを塞ふさがんとはなさざりき。

と見れば雪の寒紅梅、血汐ちしおは胸よりつと流れて、さと白衣びやくえを
染むるとともに、夫人の顔はもとのごとく、いと蒼白あおしろくなりけ

るが、はたせるかな自若として、足の指をも動かさざりき。

ことのここに及べるまで、医学士の挙動脱兎のごとく神速にしていささか間なく、伯爵夫人の胸を割くや、一同はもとよりのかの医博士に到るまで、言を挟むべき寸隙とてもなかりしなるが、ここにおいてか、わななくあり、面を蔽うあり、背向になるあり、あるいは首を低るるあり、予のごとき、われを忘れて、ほとんど心臓まで寒くなりぬ。

三秒にして渠が手術は、ハヤその佳境に進みつつ、メス骨に達すと覚しきとき、

「あ」と深刻なる声を絞りて、二十日以来寝返りさえもえせずと聞きたる、夫人は俄然器械のごとく、その半身を跳ね起きつつ、刀取れる高峰が右手の腕に両手をしかと取り縋りぬ。

「痛みますか」

「いいえ、あなただから、あなただから」

かく言い懸かけて伯爵夫人は、がつくりと仰向あおむきつつ、凄冷せいいれい極きわ

まりなき最後の眼まなこに、国手こくしゅをじつと瞻みまもりて、

「でも、あなたは、あなたは、私わたくしを知りますまい！」

謂おそうとき晩おそし、高峰が手にせるメスに片手を添えて、乳の下深く搔き切りぬ。医学士は真蒼まっさおになりて戦おのきつつ、

「忘れません」

その声、その呼吸いき、その姿、その声、その呼吸、その姿。伯爵夫人はうれしげに、いとあどけなき微笑えみを含みて高峰の手より手をはなし、ばったり、枕に伏すとぞ見えし、唇くちびるの色変わったり。

そのときの二人が状さま、あたかも二人の身边には、天なく、地なく、社会なく、全く人なきがごとくなりし。

数うれば、はや九年前なり。高峰がそのころはまだ医科大学に学生なりしみぎりなりき。一日予は渠とともに、小石川なる植物園に散策しつ。五月五日躑躅の花盛んなりし。渠とともに手を携え、芳草の間を出つ、入りつ、園内の公園なる池を繞りて、咲き揃いたる藤を見つ。

歩を転じてかしこなる躑躅の丘に上らんとて、池に添いつつ歩めるとき、かなたより来たりたる、一群れの観客あり。

一個洋服の扮装にて煙突帽を戴きたる蓄髯の漢前衛して、中に三人の婦人を囲みて、後よりもまた同一様なる漢来れり。渠らは貴族の御者なりし。中なる三人の婦人等は、一様に深張り

の涼傘ひがさを指し翳かざして、裾捌すそさばきの音いとさやかに、するすると練り来たれる、と行き違いざま高峰は、思わず後を見返りたり。

「見たか」

高峰は頷うなずきぬ。「むむ」

かくて丘に上りて躑躅を見たり。躑躅は美なりしなり。されどただ赤かりしのみ。

かたわらのベンチに腰懸こしかけたる、商人あきゆうじ体の壮者わかものあり。

「吉さん、今日はいいいことをしたぜなあ」

「そうさね、たまにやおまえの謂うことを聞くもいいかな、浅草へ行つてここへ来なかつたらうもんなら、拝まれるんじやなかつたつけ」

「なにしろ、三人とも揃つてらあ、どれが桃やら桜やらだ」

「一人は丸髻まるまげじやあないか」

「どのみちはや御相談になるんじゃないやなし、丸髻でも、束髪でもないししゃぐまでもなんでもいい」

「ところで、あのふうじゃあ、ぜひ、高島田ぶんきんとくるところを、
いちょう
銀杏と出たなあどうい気だろう」

「銀杏、合点がてんがいにかぬかい」

「ええ、わりい洒落しやれだ」

「なんでも、あなたがたがお忍びで、目立たぬようという肚はらだ。ね、それ、まん中の水ぎわが立ってたろう。いま一人が影武者というのだ」

「そこでお召し物はなんと踏んだ」

「藤色と踏んだよ」

「え、藤色とばかりじゃ、本読みが納まらねえぜ。足下そこのようでもないじゃないか」

「眩まばゆくつてうなだれたね、おのずと天窓あたまが上がらなかつた」

「そこで帯から下へ目をつけたろう」

「ばかをいわつし、もつたいない。見しやそれとも分かぬ間だつたよ。ああ残り惜しい」

「あのまた、歩行あるぎぶりといつたらなかつたよ。ただもう、すうつとこゝろ霞かすみに乗つて行くようだつけ。裾捌つまき、棲つまはずれなんということを、なるほどと見たは今日がはじめてよ。どうもお育ちがらはまた格別違つたもんだ。ありやもう自然、天然と雲上うんじょうになつたんだな。どうして下界のやつばらが真似まねようたつてできるものか」

「ひどくいうな」

「ほんのこつたがわつしやそれご存じのとおり、北廓なかを三年が間、金毘羅こんびら様に断たつたというもんだ。ところが、なんのこたあ

ない。肌守りを懸けて、夜中に土堤を通ろうじやあないか。罰のあたらないのが不思議さね。もうもう今日という今日は発心切った。あの醜婦どもどうするものか。見なさい、アレアレちらほらとこうそこいらに、赤いものがちらつくが、どうだ。まるでそら、芥塵か、蛆が蠢めいているように見えるじやあないか。ばかばかしい」

「これはきびしいね」

「串戯じやあない。あれ見な、やつぱりそれ、手があつて、足で立って、着物も羽織もぞろりとお召しで、おんなじような蝙蝠傘で立ってるところは、憚りながらこれ人間の女だ。しかも女の新造だ。女の新造に違いはないが、今拝んだのと較べて、どうだ。まるでもつて、くすぶつて、なんといいか汚れ切つていらあ。あれでもおんなじ女だつき、へん、聞いて呆れらい」

「おやおや、どうした大変なことを謂い出したぜ。しかし全くだよ。私もさ、今まではこう、ちよいとした女を見ると、ついそのなんだ。いつしよに歩くおまえにも、ずいぶん迷惑を懸けたつけが、今を見てからももうもう胸がすつきりした。なんだかせいせいとする、以来女はふつつりだ」

「それじゃあ生涯しょうがいありつけまいぜ。源吉とやら、みずからは、とあの姫様ひいさまが、言いそうもないからね」

「罰があたりあ、あてこともない」

「でも、あなたやあ、ときたらどうする」

「正直なところ、わっしは遁にげるよ」

「足下そこもか」

「え、君は」

「私も遁にげるよ」と目を合わせつ。しばらく言途絶ことばえたり。

「高峰、ちつと歩こうか」

予は高峰とともに立ち上がりて、遠くかの^{わかもの}壮俊を離れしとき、高峰はさも感じたる^{おももち}面色にて、

「ああ、真の美の人を動かすことあのとおりさ、君はお手のものだ、勉強したまえ」

予は画師たるがゆえに動かされぬ。行くこと^す数百歩、あの樟^{くす}の大樹の鬱蒼^{うつおう}たる木の^こ下蔭の、やや薄暗きあたりを行く藤色の^{きぬ}衣の端を遠くよりちらとぞ見たる。

園を出^いずれば^{たけ}丈高く肥えたる馬二頭立ちて、磨^すりガラス入るたる馬車に、三個^{みたり}の馬丁^{べつとう}休らいたりき。その後九年を経て病院のかのことありしまで、高峰はかの婦人のことにつきて、予に^{こと}すら一言をも語らざりしかど、年齢においても、地位においても、高峰は室あらざるべからざる身なるにもかかわらず、家を

納むる夫人なく、しかも渠は学生たりし時代より品行いつそう
謹厳にてありしなり。予は多くを謂わざるべし。

青山の墓地と、谷中やなかの墓地と所こそは変わりたれ、同おなじ一日に
前後して相逝ゆけり。

語を寄す、天下の宗教家、渠ら二人は罪惡ありて、天に行く
ことを得ざるべきか。

外科室

底本：「高野聖」角川文庫、角川書店

1971（昭和 46）年 4 月 20 日改版初版発行

1979（昭和 54）年 11 月 30 日改版第 14 刷発行

入力：今中一時

校正：浜野 智

2005 年 9 月 16 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。